

第二話「本所・桜屋敷」も、長谷川平蔵の生い立ちや青春時代が描かれていて、第一話の「啞の十蔵」とともに『鬼平犯科帳』の総論・序論といったつくりになっている。あらずじは、前篇「啞の十蔵」で捕り逃がした盗賊・小川や梅吉を追って本所に来た長谷川平蔵が、青春時代を過ごした高杉銀平道場の跡地で、二十年ぶりに剣友・岸井左馬之助と再会する。二人の初恋の相手「おふさ」の想い出話に、「おふさ」の二十年後の変わり果てた姿を事件にからめて、軽快なテンポで進行する。天明八年正月の話である。

この第二話では、『鬼平犯科帳』を支える「いつものメンバー」が、続々登場して来る。剣友・岸井左馬之助に続いて、密偵第一号となる「鬼平」の昔仲間・相模無宿の彦十。さらに、長谷川平蔵の亡父・宣雄、一刀流の剣客で平蔵、左馬之助の師匠・高杉銀平、果鴨の百姓・三沢仙右衛門、火付盗賊改方の同心・酒井祐助、日本橋・鉄砲町の御用聞き・文治郎、長谷川平蔵の妻女・久栄の父親・大橋与惣兵衛などが紹介されている。

いいの。何か特別な意味を持つ言い回しなのか。何故、「年に一度」ではいけなかったのか、気になってしょうがない一節である。

この話の最後に、長谷川平蔵が、神田川の船宿から舟で大川へ出て、堅川を通過して、横川へ入り、本所・出村町の「桜屋敷」の岸辺に行く描写がある。そこで平蔵が、山桜を背にして岸辺にただずむ岸井左馬之助の姿を見つける…。この第二話「本所・桜



# 『鬼平犯科帳』細見

## 第三回 剣友・岸井左馬之助 との再会、密偵第一号は 相模の彦十

文 松本英亜  
text by Hidesugu Matsumoto



屋敷」の最も印象的な場面だ。

このコースを、舟で再現してみたいところだが、現在、堅川は水深が浅くて舟での航行ができない状態。横川も「大横川親水公園」となっている。そんなわけで、舟で行くことはできない。

そこで、この行程を、原作に沿って歩いてみることをおすすめしたい。なにしろ、この付近は、『鬼平犯科帳』の原点といった場所、話の舞台を確認

また、「急ぎ盗」という池波さんの専門用語や、本所・二ツ目の軍鶏なべ屋「五鉄」も、この「本所・桜屋敷」に初めて登場して来る。

この話の中で、長谷川平蔵夫婦は、赤子の養女「お順」を、「役宅内の長屋に住む同心・酒井祐助の妻からもらい乳をし、育てている」という記述がある。これは少々おかしい。酒井祐助は、この後の『鬼平犯科帳』では、一貫して独身の同心として描かれていて、第五巻・第七話「鈍牛」には、平蔵と酒井祐助の会話として、「酒井。来年はぜひとも女房をもらおうのだな」というのがある。従って、ここは、酒井祐助ではなく、妻子五人を養っている同心・山田市太郎あたりしておくべきではなかったか…。

また、原作に、高杉道場の跡地で出会った、長谷川平蔵と岸井左馬之助の会話で、左馬之助が「十月に一度ほどはな。近くに住んでいることだし…」と、答える場面があるが、これはどういう意味なのか、単に、「十月に一度」と、文字どおりに考えて

しながら散策してみるのも一興である。それにしても、男は純情でロマンチストだ…。



「小さな旅『鬼平犯科帳』ゆかりの地を訪ねて 第5部」小学館スクウェア 定価・本体価格 1,800円(税抜) 好評発売中



**Profile**  
1942年東京生まれ。東邦大学医学部卒業。医学博士。医療法人社団同友会顧問。著書に『小さな旅 鬼平犯科帳ゆかりの地を訪ねて』第一部～第五部(小学館スクウェア)。